おまもりひま……り？

紅い？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おまもりひま……り？

【Ｎコード】
Ｎ７２９６Ｙ

【作者名】
紅い？

【あらすじ】
作者、紅い？のｇｄｇｄ二次創作です！
……何故こんなマイナーなものを？　……なんでだろ？
という感じでやっていきます。

零匹目（前書き）

はじめまして、紅い？です。
ggdな駄文ですが、暇つぶし程度にどうぞ！

零匹目

「若殿！　早くおきるのじゃ！」

元気な、元気すぎて、頭が痛くなる程の声が聞こえる。

……あと、なんか息苦しい――気がする。

「こら！　せっかく緋鞠が起こしてくれてるんだから、早く起きろ！」

今度は別の声が聞こえる。

……あと、なんかこれでもかって程、揺さぶられてる――気がする。

「うーん、あと五分」

「そんな甘えが、許される訳なかろう、とっとと起きんか！」

ズシャ、と、日常では発生しないはずの効果音が聞こえる。

……顔がすげぇ痛い。

「これでも起きんか……しょうがない。加耶、『アレ』をやるぞ」

「『アレ』だな！」

「そう、『アレ』じゃ！」

楽しそうな、嫌な予感しかしない声が聞こえる。

……やっぱ、顔痛い。

「「せぇーの！」」

――ドスンッ！

「グハッ！！」

いつも通りに、腹部に激痛が走る。あまりの痛みに目を開けると、そこには、一人と一匹の『ドヤ顔』があった。

「テメェら……今日という今日は、ぜっっっっってぇゆるさねぇ！！」

「逃げるぞ加耶！」

「あいさ緋鞠！」

「待ちやがれェエエエエ！！」

そして、今日も俺――天河優人の一日が始まった。

零匹目　『ネコと俺の日常』

「まったく、朝から酷い目にあったぜ」

ボロボロのパジャマで悪態をついている幼児が、そこには居た。

――天河優人

鬼斬り役という、魑魅魍魎を狩る者達の末裔であり、『おまもりひまり』の主人公であり、そして何より――『転生』という、貴重で数奇な体験をした者の一人である。

「おお、優人。今朝はだいぶ早いな」

「じいちゃん、……もう緋鞠と加耶を、俺の目覚ましに使わないでくれ。俺が持たない」

「そう言うな。奴らも悪気があるわけではない」

「嘘つけ、みえみえの悪意じゃねえか」

「うっ……」

優人と共に軽口をたたく老人――天河源之助は、若干顔を顰める。

「図星だろ？」

「そ、それよりいいのか？　緋鞠が縁側で待っておったぞ」

「（あからさまに話を逸らしやがった……）ああ、朝飯食ったらいくさ」

「そうか、それでは、ワシは忙しいので、失礼さしてもらおうかの」

そそくさと、それも、コイツ本当に老人か？　と思うほどの速さで逃げていく翁。

「あっ、またクソジジイ！　……はあ、仕方ねえ。飯でも食いにいくかな」

ボロボロのパジャマと疲労のせいで、さっきよりも数段みすぼらしくなっている幼児が、そこにはいた。

……なんか急に泣きたくなってきた。

ところ変わって、今は森。

あの後は、特に何も無く、平和においしく朝飯を食べた俺は、（した覚えのない）約束通り緋鞠に連れられ、野井原村散策をしていた。

「ほれ、どうした若殿。元気ないぞ」

「いつものことだ」

「覇気も無い」

「ほっとけ」

……何故だろう、原作キャラと一緒に居ると、どうしても気まずくなる。

「……つまらんのか？」

緋鞠（猫）が、不安そうに顔を覗き込む。

というか、猫ってそんな器用に表情つくれんのか。転生したのは、もう三年以上前だし、もう大抵のことは知ってると思ったんだけど。

――なんか新鮮。

「そういう訳じゃ無いんだが……」

「なら、何でそんな仏頂面なのじゃ？」

「これは仏頂面じゃねぇ、ポーカーフェイズ気取ってるだけだ」

「気取るって……普通自分じゃ言わんじゃろ」

「そう……かな」

「そうじゃよ」

「そう、だな」

――こんなとき、『本物』の天河優人だったら、どうしたんだろうな。

なんて、柄にもなく考え込んでしまう。もっと違った選択肢が、キャラが、振舞い方があったんじゃないかって、そう、思ってしまう。

「大丈夫じゃよ」

そんな俺の表情を――感情を感じ取ったのか、緋鞠が声を掛けてくる。

「何があったのかは知らん、じゃが、若殿は若殿じゃ」

優しく、温かい、そんな声で。

「ああ」

まだ、考え事は続く。だが、少なくともコンマは見えた。もう、この話は中断してもいいだろう。

「若殿、私は辛気臭いのは嫌いじゃ」

「激しく同意だよ。……そうだな、んじゃ、いっちょいつもの川まで競走でもっすか」

「ほう、猫に競走を挑もうとは、いい度胸じゃな若殿」

「それじゃいくぞっ！！」

「にゃっ！！　フライングとは卑怯じゃぞ！！」

「卑怯で結構コケコッコー！！」

「待つのじゃァアアアアア」

――だって、俺はこの、気まずくとも楽しい『この時間』が、大好きなのだから。

――グシャッ！！

「イダァァァァァッ！！」

「ふん！　卑怯で結構コケコッコー、じゃ！」

……訂正、やっぱ楽しくねぇわ『この時間』。

零匹目（後書き）

誤字脱字苦情その他がありましたら、感想までお願いします。

一匹目（前書き）

どうも、紅い？です。
息抜きの方が多いってどういう事？
そんな感じの投稿二話めです。

一匹目

「はっはっはっはっ！　若殿はノロマじゃの～」

「てっめぇッ！　クソ猫の分際でッ！」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえんの～」

「クソがァァァァァ！！」

上の文で分かるように俺達は今、プライドを懸けた？　レースをしている。

……状況が分からない？　とりあえず前話を読んでくれ。

さて、メタな話はこの辺にして、レースに集中しよう――

――ガクン。

――と思ったが、どうやら無理らしい。

……いや、急すぎる展開だって事ぐらい俺だって分かるよ？　でもさ、しょうがないじゃん。人生踏み外す時は踏み外すもんだよ――主に、崖を。

「んなっ！！」

「はーッはッはッはッはッは～」

緋鞠の声が、ドップラー効果を起こして、遠ざかっていく。

まあ、俺の身体が重力に従って落ちてんだから、しゃーないんだけ

ど。
……というか、主見捨てて逃げるとか、クソ薄情な、クソムカつくクソ猫だなぁ。オイ。
そんなこんなで、俺は原作とは少し違う形で崖から落ちた。
地面に叩き付けられ、スップラッタな状態になる前に俺が見たものは、金髪の――本当に綺麗な金髪を持つ幼女だった。
――なんでテメェなんかがこんな所に居んのさ、タマ。

一匹目　『狐とゲームと神様と』

「――きて」
――なんか、声が聞こえる気がする。
「――起きて」
――なんか、デジャヴを感じる気がする。
「起きてって言ってんじゃん」

――なんか、絶対ヤバい気がする。

「起きろよ。このクソが」

メキッと、通常、正常な人体が発する事の無いであろう音が鳴る。肺の中の
空気が一斉退去し、数瞬呼吸が出来なくなった。

――というか、普通崖から落ちた奴の鳩尾に妖怪フックをぶち込むとか、マジ
でねぇと思うんだ。俺。

――何……しやが……る

息絶え絶えに抗議をする俺に向かって、金髪の幼女――タマは、当然の様に答える。

「何って？　決まってんじゃん。治療だよ。ち・りょ・う」

――治療？　どう考えても、今のは唯のフックパンチだろ？

「わかってないなぁ。いい？　普通崖から落ちた人間は、死んじゃうんだよ？　原作では、緋鞠が居たからなんとかなってたけど。結局、そんなの現実じゃ起こらないフィクションでしかないんだよ？」

おどけた様に、まるで、普通の女の子の様に、彼女は『物語』上、絶対にあ
りえてはならないセリフを、平然と口にした。

――こいつ、今、『原作』って！

驚愕だった。何故、一登場人物にしかすぎない彼女が『原作』という言葉を知って――口に出しているのか。

「その認識は間違いかな。だって、今の私は『魂』であって『タマ』では無いんだから」

――『魂』？

「そう。『魂』。君たち風に言うのなら、『神様』。あなたを転生させた張本人って言えば解り易いかな」

またも驚きの事実発覚だ。だが、俺にも人間特有の高い適応能力があったらしく、今度は冷静に応答することができた。

――だが、お前が『神様』である確証が無い。

「気がつかない？　今まで君は『一言も』言葉を発していない」

――ッ！

そうだ。よくよく考えてみれば、俺は一言も話していない。いや、話せていない。

「理解はしたみたいだね。それじゃあ、本題」

――本題？

そう彼女が言った瞬間、急に空気が変わる。

「本題、というよりは、案内というべきだったかな」

場に飲まれない様に、軽口を叩くのが俺の限界だった。それ以上は、何を、

どうする事もできなかった。

――ますます分からんな。

「だろうね。なら、始めにこう言っておくべきだろう」

彼女は一呼吸置き、こう続けた。

「ようこそ、『人形戦争（ウォーゲーム）』へ」

それはまるで、被害者の様に、加害者の様に、偽善者の様に、偽悪者の様に、最強者の様に、最弱者の様に、楽しそうな、悲しそうな、憎たらしそうな、愛しそうな、嬉しそうな、苦しそうな、そして――

――そしてなにより、作り物の様な笑みを浮かべてそう言った。

『人形戦争（ウォーゲーム）』

神が気まぐれで行う、賭け事の様なものなのだそうだ。

ルールは簡単で、死んだ人間の魂を選別し、自分流にアレンジした駒――つまりは『転生者』を作成する。『転生者』には、自らが作り出した世界に行ってもらい、『物語』を終わらせてもらう。

ここまでが前振り。重要なのはここからで、『物語』をどんな形でも終わらせた――もしくは終えた――『転生者』は、所有されている神のランクによって別けられ、『戦争』を行わされるのだ。それも最後の一人になるまで。

最後の一人の魂が、神格を宿すまで。

つまるところ、『人形戦争（ウォーゲーム）』とは、新しい神決めなのである。

……と、まあ理屈っぽく語って見たが、これは現実逃避でしかなく。要するに、だ。

――俺にその『人形戦争（ウォーゲーム）』とやらに参加しろ、と？

「参加しろ。ではなく、参加した。だよ」

さも他人事の様に、彼女は言い切った。

――拒否権は？

「無い、というよりは、既に遅いというところかな」

――なら、今から死ねば、『戦争』とか言う段階まで行けんだろ。

「無理だよ。少なくとも、今は二百回位は死んでも生き返っちゃうから」

――治療の時、俺に何をした？

「お、意外と鋭いじゃん」

何かに興味を持った子供。もしくは、研究材料を見つけた科学者の様な眼で、彼女は俺を見る。

――しゃべれないのも、それに何か関係があるのか？

「それはねぇ――――

会話を続けようとした彼女の顔が、不意に歪む。

――――ゴメン。時間切れっぽい。まあ、声は一か月あれば治るさ。とりあえず、今後の事だけど、しばらく天河家からは離れてもらうから」

――は？

キョトンとしている俺に対して、彼女は親切丁寧に補足説明をしてくれる。

「具体的には、原作開始六年前までは、人間ではなく『妖怪』のサイドに付いてもらう予定ね」

いくら親切丁寧に補足説明して貰っても、納得できない事だってある。

だって、人間だもの。

と、心の中で抗議をしていた俺だが、ゴスッという音で意識が遠のいていく。

「ホントに時間がなかったの。悪く思わないでね（笑）」

本当にムカつき、苛々し、胸くそが悪くなる。そんな捨て台詞を残し、彼女は去って行った。

――わーったよ、畜生、やってやるよ。この『人形戦争（ウォーゲーム）』、絶対に勝ち残ってやる。

薄れていく意識の中。まだ完全に落ち切って無い意識を総動員して俺はそう誓った。

だが、この誓いは、後にいともたやすく、木端微塵に砕け散ってしまうことになってしまうのだが、まあもっとも、俺がこの事実を知るのは、まだまだ先の事だろう。

一匹目（後書き）

誤字脱字苦情その他がありましたら、感想までお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7296y/

おまもりひま……り？

2011年12月28日04時48分発行